

何かしなければ

2019.11.15

梁川高校の2年生は、一昨日から修学旅行で京都・大阪方面に行っている。1日目の「郷土PR活動」は、大盛況によりわずか8分で終了してしまっただけで、本校の2年生がPR活動を始める前に、京都の新聞社から電話がきた。いろいろと聞かれたが、その中で答えられない質問が2つあった。台風19号の被害により今でも避難されている方は何人くらいいますか。寿健康センターに避難されている方がいらっしゃることは知っていたが、人数までは把握していなかった。もう一つが、被災されたお宅は何軒ですか。これもたくさんのお宅が浸水被害に遭われていることはわかっていたが、正確な数は把握していなかった。

早速、伊達市役所の担当課に電話した。すると、親切に教えていただいた。11月13日の時点で避難されている方の数は114名だった。つい、電話口で「そんなにですか」と言ってしまった。被災家屋のほうは、床下浸水が224軒、床上浸水が410軒だった。10月15日（火）の記憶が蘇った。10月13日（日）に梁川地域を見にきた私は「これは大変だ」という意識でスイッチが入った。そして10月15日（火）に学校周辺を歩いて見てまわった私は「これは授業をやっている場合じゃないぞ」と思った。「何かしなければ」といても立ってもいられなくなった。

10月16日（水）に生徒が登校してきた。長靴が入った袋を手にした生徒が何人もいた。中には新品の長靴もあった。前日に一斉メールで連絡しただけだが、生徒はちゃんと準備をしてくれた。伊達市の社会福祉協議会の方と連絡をとり、生徒をクラス単位で班に分け、被災地域のボランティアへと向かった。生徒は黙々と体を動かし、重い荷物を運び、泥にまみれた箇所を洗い流し、終われば次のお宅へと移動していった。まだまだ後片付けは終わっていないが、生徒を帰さなくてはならない。途中で引き揚げてくるのは心苦しかった。それは生徒も同じ思いだったはずである。

後片付けが終わらないことはわかっているけれども授業をやらないわけにはいかない。職員打合せでは「今日は先生方お疲れ様でした。明日は通常授業でお願いします」と話した。すると、先生方が一斉に私を見た。声を発しなくても「校長先生、明日はやらないんですか」「明日もやりましょう」と訴えていることはわかった。目は口ほどにものを言うのである。そこから打合せのつもりが協議が始まってしまった。結局2日目、10月17日（木）もボランティア活動を行うことにした。地域の方も我々も10月18日（金）には雨が降るということがわかっていた。だから、10月17日（木）までが勝負なのである。とにかく人手が足りなかった。その日の朝は、長靴を手にした生徒がさらに増えており、前日の疲れも見せず生徒たちはまた黙々と体を動かしていた。

結果的に、テレビの取材や新聞社の取材が入り、本校生徒の活躍が広く知れ渡ることとなった。これは想定していたことではない。スタートは、目の前に困っている人たちがたくさんいる。だから助けに行くのは当たり前であるという思いである。これは、生徒も教員も私も同じ思いだったはずである。生徒の感想に「お互い様というのはこういうことかと思った」というものがあった。

今回の修学旅行では、「郷土PR活動」の中で募金活動も行った。生徒は、梁川という地域とのつながりを感じているはずである。我々は、まだまだ梁川地域のためにできること、やるべきことがある。これから具体化していきたい。